

映画の生体解剖

VS

戦慄怪奇ファイル

コワすぎ!

映画には触れてはいけないものがある

高橋洋❖稲生平太郎❖白石晃士



かなざわ映画の会

【鼎談】映画には触れてはいけないものがある！◎高橋洋・稲生平太郎・白石晃士

5

- ◆蛸は呪われている◆ 5
- ◆焼き滅ぼさねばならぬもの◆ 30
- ◆触れてはいけない何か◆ 35
- ◆POVの可能性◆ 44
- ◆映画の原始的な力を再生したい！◆ 50

【エッセイ】蛸は映画に棲む／あるいはシネマトグラフィの原基◎稲生平太郎 61

【エッセイ】毒蛇をつかむ／パラチアの霊的恍惚◎稲生平太郎 73

【対談】化け物には化け物をぶつけんだよ！◎高橋洋・白石晃士（司会＝保坂大輔）83

- ◆二大幽霊はいかに戦うのか？◆ 83
- ◆貞子と伽椰子は違う？◆ 88

- ◆呪いのビデオをどう作るか◆ 93
- ◆貞子が見たい！という発想の新鮮さ◆
- ◆伽椰子パート・抜群のキャスティング◆ 102
- ◆貞子と水◆ 109
- ◆態度の悪い霊能者◆ 111
- ◆呪いのプロフェッショナル◆ 114
- ◆テレビと階段の挟み撃ち！◆ 118
- ◆呪いのパワー対決・勝つのはどっちだ？◆ 122

白石晃士監督DVD情報

128

映画には触れてはいけないものがある！

カナザワ映画祭トーク・ショウ「映画の生体解剖VSコワすぎ！」

高橋洋◆稲生平太郎◆白石晃士



映画には触れてはいけないものがある！

◆蛸は呪われている◆

高橋 みなさん、『映画の生体解剖ビヨンド2』をご覧頂いてありがとうございます。トークのメンバーをご紹介します。まず稲生平太郎さん。そしてゲスト、去年は塩田監督だったんですけども、今年には白石晃士監督に来ていただきました。僕は『ビヨンド2』の構成をした高橋です。はじめに『ビヨンド2』のコンセプトを簡単に言っておこうと思うんですが、最初に東京で打ち合わせをした時に、白石さんが生命の無気味さとか、生命が持っている無気味さみたいなものをテーマにできないかという話をされて……

白石 あ！ そのままで言っていないですけど……まあ、生命の無気味さが好きですね〜ということの話

したんですね。

高橋 それから、去年、稲生さんが取り上げたかったんだけど、時間がなくてたどりつかなかった（蛸問題）（笑）ですね。蛸と生命の無気味さ、この二つはたぶんつながるだろうから、それで考えようと思ったけどせつかく白石監督に来ていただくんだから、やっぱり（フェイク・ドキュメンタリー）のテーマも外せない。蛸を含む無気味な生命と、フェイク・ドキュメンタリーが、どうしたらつながるのかなと、本当にぎりぎりまで悩んで、もしかしてオーソン・ウエルズを主人公にすれば縦軸がつながるんじゃないかということも思いついたんです。オーソン・ウエルズはフェイク・ドキュメンタリーの元祖みたいな人ですよ。それで、『ビヨンド2』の冒頭部分でオーソン・ウエルズが長々としゃべってますが……。

白石 僕はあの元ネタの映画を見たことがないんですけど、オーソン・ウエルズのあの映画は何という映画なんですか？

高橋 『イツツ・オール・トゥルー』という未完の映画です。ブードゥーの儀式を撮ろうとして失敗して、その後もいろんなことがあつて……という。『ビヨンド2』第二部の途中に出てくる、少女が海岸で水死体を発見するシーン、あれは『イツツ・オール・トゥルー』の残されたフッテージを再編集したものであるですよ。

白石 ほう。

高橋 オーソン・ウェルズがあれをブラジルのリオデジャネイロで撮ったのが一九四二年ぐらいですか
 ー 『オーソン・ウェルズ/イツツ・オール・トゥルー』*It's All True*, 1993 オーソン・ウェルズ&リチャードウィルソン&マイロン・マイゼル&ビル・クロイン&ノーマン・フォスター監督、86分、アメリカ。一九四二年にオーソン・ウェルズが手がけながら未完に終わったセミ・ドキュメンタリー・フィルムをもとに再構成した作品。

ら、もうあの頃にネオ・レオリズモみたいな映画を作っていた、そういう意味でもびっくりするような映画なんです。それで縦軸がやつと通ったかなというところで、『ビヨンド2』を製作しました。第一部「映画で触れてはいけない何か」と第二部「そこにキメラがあればイツツ・オール・トゥルー」に分かれています。今日のトークは、だいたい『ビヨンド2』の構成に沿って進めていければと思います。まずは前半の蛸問題から稲生さんに存分に語ってもらおうじゃないかということなんですけど（笑）。

稲生 はい、蛸問題、これはお二人の理解もあまり得られなくて（笑）。世間の理解が得られないのはわかるけれども、何と他ならぬ高橋さんからもよくわからないと言われて、本当に孤立した気持ちで、ちよつとシヨックなんですけど（笑）。何から話せばいいのか……。

まあ、蛸問題は、『映画の生体解剖』（洋泉社/2014年3月刊）を高橋さんと作った時には、実



『オーソン・ウェルズ/イツツ・オール・トゥルー』

はもう頭の中にあつた。ただ、さすがにこれは世の中には受け入れられないだろうということで、隠蔽したけれども、ずつと気になっていました。高橋さんが今回製作した『ビヨンド2』ではオーソン・ウェルズが主役の扱いですが、私が映画における蛸を最初に印象づけられたのは、他ならぬオーソン・ウェルズの『上海から来た女』(1947)なんです。『ビヨンド2』にもそのところを入れてもらいましたが、水族館でウェルズがリタ・ヘイワースと逢う場

2 『上海から来た女』*The Lady from Shanghai*, 1947 オーソン・ウェルズ監督・製作・脚本・主演、87分、アメリカ。セントラルパークで知り合った美しい人妻の罠にはまり、殺人犯に仕立てられる男を描いたサスペンス。とことん売れなかつたことで知られている作品だが、その特徴的な映像は、後にさまざまな映画に引用されることとなった。

面で蛸が映る。それを今から四十年くらい前、大学生の頃に見て、その時に蛸に強い印象を受けた。したがって、私の頭の中では『上海から来た女』は「蛸映画」という分類に入っている（笑）。

これにはちよつと説明が必要かも知れません。映画というものは、当然ながらいろいろな見方があつてかまわないわけですが、それでもなおかつ、私の映画の見方がかなり変だという自覚はある。例えば『映画の生体解剖』でも言つたけれど、たとえば鈴木清順の『殺しの烙印』³（1967）、これは若いときから何回か見ているけれども、思い出そうとすると、浮かんでくる映像はいつも飛行機だけなんです

3 『殺しの烙印』1967 鈴木清順監督、91分、日本。殺し屋ナンバー3の花田（宍戸錠）は死の世界へと誘う美女と出会い、正体不明のナンバー1と戦う某略に巻き込まれてゆく。清順日活退社の原因となった異色作。

ね。冒頭に飛行機が出てきて、それが記憶に刻印されている。そうすると、『殺しの烙印』というのは、私の頭の中では「乗り物映画」だと。私はいわば幼稚園レベルで映画を感じているわけで、これには自信があります（笑）。カナザワ映画祭の主宰者の小野寺くんなんかは自分が小学生レベルだと威張っているけれども、甘いんだよな、私はさらにその上というか下をいく。したがって、オーソン・ウェルズの映画『上海から来た女』の見方はいろいろあるでしょうけれども、私にとつては「これは蛸映画だ」と。そういうことですな。

とはいえ、それから長いこと蛸の問題はさほど気にしていなかった。次に蛸問題が浮上したのは、エド・ウッドの映画を見直していた時になる。『怪物



『上海から来た女』

の花嫁』⁴（1955）という映画がございまして、ティム・バートンによるウッドの伝記映画にも出てきますね。エド・ウッドにしては妙にしっかりしたC級の、立派な（笑）映画なんですけれども、この作品に大した意味も必然性もなく蛸が登場する。エド・ウッドという人は、基本的に、自分が昔見て好きだった娯楽映画の場面を機械的に反復コピーしていくタイプだと思いますので、〈無意味な蛸〉はおそらく映画の歴史でかなり古くまで遡るのだろうという見当がつく。

そこで蛸に着目して色々記憶を辿ってみると、一九四〇年代のアメリカの連続活劇に『Drums of

4 『怪物の花嫁』Bride of the Monster, 1955 エド・ウッド・D・ウッド・ジュニア監督・製作・原案、68分、アメリカ。マッド・サイエンティストが原子力で怪人を造り出そうとした顛末を描く。



『フー・マンチャーの太鼓』 ボタンを押すフー・マンチャー

Fu Manchu (フー・マンチャーの太鼓⁵) (1940) というのがあって、これも『ピヨンド2』に入れてもらいましたが、蝮が出現する。フー・マンチャーが机の前に坐っていて、その目の前に善玉の青年が立っている。フー・マンチャーが机の上のボタンを押すと、床がぱかっと開いて青年は落っこちちゃう。落っこちるとなぜかそこが川で——あるいは、蝮がいるんだから海なのか——ともかく水があつて、唐突に、意味もなく蝮がいて、青年を襲う。そういうシーンがあるんですね。「あ、このあたりがエド・ウッドの蝮の原型だな」とまずは納得した。

5 『Drums of Fu Manchu (フー・マンチャーの太鼓)』1940 ジョン・イングリッシュ&ウイリアム・ウィットニー監督、15章全269分、アメリカ。世界征服を目指すフー・マンチャーは、それを可能にするというジンギス・カンの墓の鍵を手に入れようとするが……。



『フー・マンチャーの太鼓』

ところが、その後、淀川長治先生の本を読みますと、一九一九年に、やはり同じく連続活劇で、こちらはもちろんサイレントですけれども、『The Lightning Raider』という作品への言及があった。『電光石火の侵入者』という題名で日本でも公開されていますが、ただし、これはフィルムほとんどがアメリカでも現存していない。淀川先生はこれを幼い頃に見ていて、しかも驚異的な記憶力の持ち主なので、この作品の中で、地下に川なり海なりがあつて、そこに蝮が現れ人を襲う場面があつたのだとおっしゃる。そうすると、「これこそが訳もなく蝮が登場する原型なのか!」と驚いた。

長々と話してきましたが、誤解していただくに困る。6 『電光石火の侵入者』The Lightning Raider, 1919 ジョージ・B・サイツ監督、15章30分、アメリカ。怖い物知らずの美女が、スリルを求めて怪盗ごっこに興じているが、億万長者と知り合つて……。

化け物には化け物をぶつけんだよ!

❖ 二大幽霊はいかに戦つたのか? ❖

保坂 まずは高橋さん、『貞子vs伽椰子』をご覧になった感想を。

高橋 僕は初号試写でスタッフの皆さんと見たんですけど、率直におもしろかったです。インパクトがあつて、勢いがある。バーサスものとしては、非常に正しいことをやったな、これはいけるぞ、と。

保坂 勢いを感じるというのはどんな点が?

高橋 うん、場面の展開がうまいんだよね。

白石・保坂 ほおー。

高橋 パラレルに話を進める場合、こっちはこう、一方あつちは……と仕切らないといけないんだけど、それがダサくなりがちなんです。例えば怪獣の対決ものとかで、あちらではキング・コングが暴

れ、こちらにはゴジラが出現し、という風に話が散る。最後にはこの二体が対決するのはわかっているから、「段取りでやってる」感が出てしまう。だけど『貞子vs伽椰子』は乗りが良くて、「二つの流れがどう交わるか?」の期待を高めるように構成されている。パラレルになっていることでスピードが落ちたりせず、ドライブ感を維持していた。そこは脚本の構成の巧みさ、演出の上手さだな、と思いましたよ。

白石 ありがとうございます。

高橋 最初、『貞子vs伽椰子』というタイトルを聞いた時、どうやって対決させるのかなと考えた。モンスター対決ものは、『エイリアンVSプレデター』¹、
1 『エイリアンVS.プレデター』Alien vs. Predator, 2004 ポール・W・S・アンダーソン監督, 101分、アメリカ。南極の地下遺跡で、プレデターとエイリアンの闘いに巻き込まれた人々を描く。

(2004)とか『フレディVSジェイソン』(2003)²とかあるけど、幽霊対幽霊だからね。お岩対お菊みたいなことだから(笑)、貞子と伽椰子が取っ組み合いをやつたつてしょうがないし、どうするんだろ

うって興味を持つて、なるたけ情報を入れないで見た。で、シンプルに呪いのパワー対決なんだとわかった。言われてみればそうですね、その勝負しかな

白石 確かに、肉弾戦をするわけにはいかないし、どうするんだつて思いますよね(笑)。

高橋 小林(剛)プロデューサーに見る前に会つて、同じ興味を言ったんですよ、幽霊と幽霊がどうやって戦うのかと。そうしたら、小林プロデューサーが、

2 『フレディVSジェイソン』Freddy vs. Jason, 2003 ロニー・ユー監督, 98分、アメリカ。《エルム街の悪夢》と《13日の金曜日》の殺人鬼が激突。夢と現実をまたいで奇妙な闘いが繰り広げられる。

「今、巷では、そういうことではなくて、どっちが勝つかで話題沸騰なんですよ」と。「あ、世の中つてそうなんだ」と。

白石 高橋さんの着眼点は普通の人にはない、ということですよ(笑)。私も、バーサスものとしておもしろかつたと言われている『フレディVSジェイソン』を見ましたが、肉弾戦をしたらプロレスのおもしろさに完全に変わってしまうな、とは思いました。それから、人間の存在がないと——人間が闘いを見ているというシチュエーションがないと、怪獣が孤島で戦っているのと変わらなくなる。だから、必ず人間を存在させて、人間が見ているというシチュエーションでやるということを念頭に置いて話を考えました。

高橋 『フレディVSジェイソン』でも『エイリアンVS.プレデター』でも、人間が介在するんですけど、敵の敵は味方という論理で、モンスターと共闘しようとする。『フレディVSジェイソン』だと、人間はジェ

イソン側に付くんですよ、ジェイソンと共闘してフレディを倒そうとする。『エイリアンVS.プレデター』だと、話を通じるのはプレデターだから(笑)、人間とプレデターが共闘するのね。それで、エイリアンを倒そうとする。そこがもう一つ乗れないところですよ。貞子と伽椰子はどっちも話を通じないからね(笑)。

白石 確かに。

高橋 貞子は黙ってるしね、伽椰子はカカカカって、あの独特な音を出すだけだし。フレディなんかはよくしゃべるんだよね(笑)、べらべらと自分の悪巧みをいちいちしゃべる。

白石 貞子・伽椰子はフレディみたいに話芸を披露できないですからね。

高橋 そこがいい。しゃべらない者どうして、人間とは話が絶対に通じないというのがいいわけです。

保坂 僕は結構前に小林さんから『貞子vs伽椰子』をやるよ、ということを知っていたんです。だから、

手なことが書いてあったんですけど(笑)、そこはいろいろと帳尻を合わせつつ、あの形に至った。怖いものにしたという製作側の要望があったので、終盤は怖くないかもしれないですけど(笑)、前半はホラーのテイストを崩さずに行こうと。そして、ちゃんとした人間ドラマを描こうとすると、その尺が長くなってしまっているので、強いて人間ドラマは描かずに、勢いで行くんだということ、話を考えた。**保坂** 霊能者・常盤経蔵(安藤政信)が出てきて「化け物には化け物をぶつけんだよ」と言う。あのせりふが素晴らしいんですよ。

白石 もとのプロットにあった呪いを相殺するというアイデアは僕も気に入って、自然とああいうせりふになったと思います。

白石監督より早くこの企画を知っていたんじゃないかなあ。その時に僕も、どうやって戦う？ 自分だったらどうする？ と考えたんですけど、全然浮かばなくて。白石さんが取った方法は、貞子と呪いと、呪怨の呪いをぶつけることによって、二つの呪いを一気に消滅させるということ、あの発想がすごいなって。

白石 実は、私が入った時に、叩き台のプロットがあったんですよ。KADOKAWAとユニバーサルの立てたコンセプトをもとに、清水匡さんが書いたものが。そこでもう呪いのパワー対決という基調になるものが出ていた。そもそもこの企画が、KADOKAWAとユニバーサルの首脳陣が、呪怨の家で呪いのビデオを再生したらどうなるか、という話をしたところから始まっているそうなので。

保坂 呪怨の家で、貞子の呪いのビデオを流すというところまでは、僕にも思い浮かぶんですけどね。

白石 最初のプロットには、もっとお金がかかる派



経蔵と珠緒 ©2016「貞子vs伽椰子」製作委員会